



月刊

2020

4
月号

みんぱく

特集

知的生産の フロンティア

多もてくるものやその中に
に任せられたものも数人ある。
おけるあたらしい宗教運動ウ
フラーゴロ(万日白色回廊運
動)とスルの国にいたにに親密な関係が発生して
きた。
それは、ブルガリアの伝統的宗教ボギツの後継者
をもって住しながらも、そのしめすところ、すてにあ
らなしい世界主義、世界回廊主義をつよきにつけていた。



知的生産のフロンティアへようこそ 小長谷有紀
梅棹忠夫アーカイブズのねらい 久保正敏
今日の知的生産の手法 堀正岳
カラコラム・ヒンズークシ学術探検と知的生産 子高進
東南アジア学術調査 信田敏宏
ウメサオの霧箱 高野明彦

知的生産のフロンティアへようこそ 小長谷有紀
梅棹忠夫アーカイブズのねらい 久保正敏
今日の知的生産の手法 堀正岳
カラコラム・ヒンズークシ学術探検と知的生産 子高進
東南アジア学術調査 信田敏宏
ウメサオの霧箱 高野明彦

秩序としづけさ

暦本 純一

プロフィール
1961年東京都生まれ。情報科学者。東京大学大学院情報学環教授、ソニーコンピュータサイエンス研究所フェロー、副所長。2020年4月に開設されるソニーCSL京都のディレクターに就任。Urban Automation（人間拡張）、人間とAIの能力がネットワークを越え相互接続・進化していく（Network of Abilities）の研究を推進。著書に、オーガメンテッド・ヒューマン（エヌ・ティー・エス）などがある。

梅棹忠夫の『知的生産の技術』を最初に読んだのは高校に上がる直前の春休みだったと思う。父の本棚からその岩波新書を発見し、すっかりかぶれてしまい、高校の授業に京大型カードを持ち込んでノート代わりにしたり、大学でもカードで研究メモをとったりしていた。

その後、研究者となった私は、コンピュータと人間のインターフェースの研究を進めていた。そのときも知的生産の技術はどこかで心の中にあつた。一九九一年に、情報科学の研究者マーク・ワイザーが、「二世紀のコンピュータ」という論文を発表し大きな反響を呼んだ。この論文は、大型計算機からパーソナルコンピュータへと進化したコンピュータがユビキタスに、つまり実世界の至るところにコンピュータが遍在するようになるというビジョンを示したもので、次のような文で始まっている。

「もつとも深淵な技術はみえなくなる。それ自身身が日常生活と不可分になるまで、その一部に編み込まれていく。」

（マーク・ワイザー「二世紀のコンピュータ」）

ところが、ワイザーのこのビジョンは、コンピュータがただ沢山あるような世界だと表面的に解釈されてしまい、そういう技術展示なども多くつくられる

ようになってしまった。それを気にしてか、ワイザーはユビキタスという用語から「Calm Technology（静かな技術）」という表現を使うようになる。技術の静けさ。技術が生活の中に静かに溶け込み、その機能を享受できる状態。おなじころ、何気なく『知的生産の技術』を読み返してつぎの記述があるのに気づき驚いた。ワイザーのいう静かな技術を二〇年以上も前に予見しているように思えたからだ。

「知的生産の技術の話全体が、能率の問題としてうけとられやすいのである。しかし、じつさ いをいうと、こういう話は能率とは無関係ではないにしても、すこしべつのことかもしれない。（中略）整理や事務のシステムをととのえるのは、『時間』がほしいからではなく、生活の『秩序としづけさ』がほしいからである。」

（梅棹忠夫『知的生産の技術』）

ユビキタスコンピューティングは最近ではIoTと呼ばれるようになり、ITが至るところに組み込まれ生活の利便性を向上させる「スマートシティ」の提案も盛んである。スマートで便利で効率的な都市。だが、それだけでそこに住みたいだろうか？ 効率の追求にとどまらない、梅棹、あるいはワイザーが示した秩序としづけさが保たれる世界をめざしていきたい。

月刊 みんぱく

4月号目次

- | | |
|--|---|
| <p>1 エッセイ 千字文
秩序としづけさ
暦本 純一</p> <p>特集 知的生産のフロンティア</p> <p>2 知的生産のフロンティアへようこそ
小長谷 有紀</p> <p>4 梅棹忠夫アーカイブズのねらい
久保 正敏</p> <p>5 今日の知的生産の手法
堀 正岳</p> <p>6 カラコラム・ヒンズークシ学術探検と知的生産
子島 進</p> <p>7 東南アジア学術調査
——梅棹忠夫の「移動研究室」
信田 敏宏</p> <p>8 ウメサオの霧箱
——探検的思考のための装置
高野 明彦</p> | <p>10 ○〇してみました世界のフィールド
環境・消費について考える
——マドリードの一市民として
折井 善果</p> <p>12 みんぱくInformation</p> <p>14 世界のバスケットリー×バスケットリーの世界
籠だけじゃない
上羽 陽子</p> <p>16 みんぱく回遊
台所
大澤 由実</p> <p>18 シネ倶楽部 M
ようやくあらわれた、自己批判の芽
——「ガサの美容室」
菅瀬 晶子</p> <p>20 ことばの迷い道
世界でいちばん(?) 複雑な声調体系をもつ言語
内原 洋人</p> <p>21 次号予告・編集後記</p> |
|--|---|

知的生産のフロンティア

みんぱくの初代館長、梅棹忠夫は世界各地で学術調査に携わった。そこで生まれたフィールドノートやスケッチといった資料は多くの論文や著作へとまとめられた。梅棹が手作業で実践した知的生産の方法と考え方は、情報技術が発達した今日も有効性を失っていない。まもなく開催される企画展と連動した本特集では、梅棹の知的生産の過程とその方法論を概観し、未来のアーカイブズのあり方を考える。

X0241166、1955年「梅棹忠夫アーカイブズ」より



梅棹忠夫生誕100年記念企画展

知的生産のフロンティア

会期 4月23日(木) — 6月23日(火)
場所 本館企画展示場

知的生産のフロンティアへようこそ

小長谷有紀 日本学術振興会 監事
民博 客員教授

梅棹忠夫(一九二〇〜二〇一〇年)は、一九五七年、文明学ということばがまだあまり使われていなかったところに「文明の生態史観序説」を書き、日本と西欧の平行進化など社会の複線的な展開をしめして文明論を開始した。一九五九年には「妻無用論」で、女性たちの社会進出をあとおししつつ、男女雇用機会

均等法制定より四半世紀前に早くも女性論を文明論の柱のひとつにすえる基礎とした。一九六三年になると、未来学者アルビン・トフラーの『第三の波』に先行すること一七年、「情報産業論」でポスト近代にはコンテンツが産業の中心になると予測していた。このように、梅棹はつねに知的生産のフロンランナーだった。

「知的生産」の産みの親

インターネットの検索エンジンで「知的生産」という語を検索すると、ざっと六七〇〇万件ヒットする。

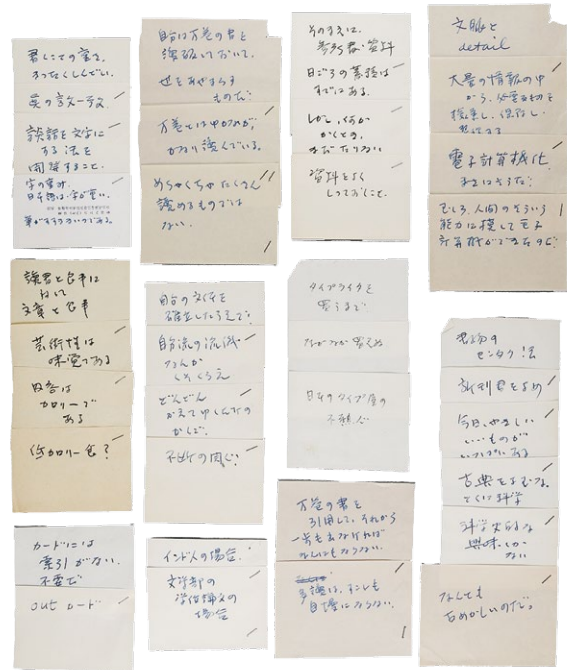


モンゴルのフィールドノート (撮影：尼川匡志、「梅棹忠夫アーカイブズ」より)

あたりまえに使われているこの語の産みの親はまぎれもなく梅棹である。岩波新書の『知的生産の技術』(一九六九年)にはじまる。

当時の編集者によれば(「梅棹忠夫——知的先覚者の軌跡」二〇一二年、千里文化財団)、こんなハウツーものは売れないと会議で却下されたものの、その年のベスト四位になるほどよく売れた。ちょうど、日本の産業構造が転換して人びとの勤務先が工場から事務所や店舗へとシフトし、「生産」の現場で「知」の具体的な方法が求められたからだろう。

ただし、同書の人気は今も衰えていない。二〇二〇年、梅棹の生誕一〇〇年を迎えると同時に、同書もまたちょうど二〇〇刷に達しようとしている。コンピュータ以前に書かれた内容が今なお読まれているのはなぜなのか。



「知的生産の技術」のための「ごさね」。文章を書くためのメモ用紙は罫罫の部品に例えて「ごさね」と名付けられた (撮影：尼川匡志、「梅棹忠夫アーカイブズ」より)

糸井重里は、梅棹を「見えない道具も見える道具もつくる」と形容し、大工の子孫であるという点で吉本隆明と共通することを指摘しながら、手作業をいとわずに道具をこのむ精神

が名著『知的生産の技術』を産み、先駆的な「情報産業論」を開いたとみている(「考える人」二〇二二年夏号、新潮社)。

たしかに、梅棹はアイデアを文章にまとめるなら紙片を使うのがよいと読者に対して見える道具を勧めている。こうした見える道具はコンピュータの無い時代だからこそ提案された。さしずめ現代なら、文章作成支援ソフトを使えば同じことが簡単にできてしまう。つまり、コンピュータ



フィールドノートから転記されたローマ字カード (撮影：尼川匡志、「梅棹忠夫アーカイブズ」より)

約五〇冊のノートに書かれた内容を、タイプライターを使ってローマ字書きでカードに転記した。ローマ字カードは約五〇〇〇枚。見出しに応じて分類し、自家製の小さな紙袋に入れた。

さしずめ現在なら、ノートの中身をテキストとしてデジタル化しさえすれば、あらかじめ分類しなくても、検索によって必要事項を簡単に抽出しうる。が、全ノートをデジタル化するのはいかほどの労力であり、それほど手間をかける価値はあるのだろうか。そんな疑心暗鬼に答えてくれるのは梅棹だ。分散してあるという極意を教えてくれる。コンピュータの無い時代の彼の取り組みは、コンピュータにさせるべきタスクにはかならない。

情熱をかたむけつくしたモンゴル 梅棹は『梅棹忠夫著作集第二巻 モンゴル研究』(一九九〇年、中央公論社)のまえがきで「わが青春の情熱をかたむけつくした」と回想している。また、『知的生産の技術』で「野帳の分量がおおいと、野外

梅棹は世界各地を歩くことによって未来の構想に資するよう文化人類学を方向づけ、「知的生産」の装置の集大成としてみんぱくを創設した。彼の残した資料をたどりながら、二二世紀における知的生産のフロンティアとは何かを考えよう。

梅棹忠夫 アーカイブズの ねらい

久保正敏 民博名誉教授

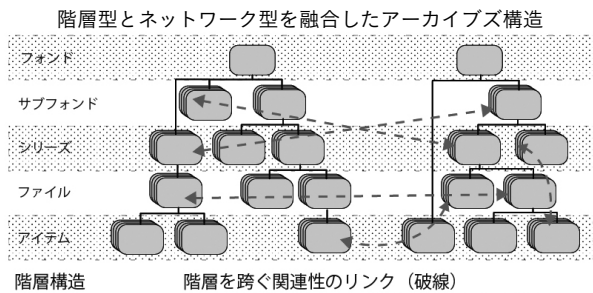
創設以来の懸案、アーカイブズの整理

民博には、館内外の研究者が残した資料が多数保管され、その整理は創設以来の課題だった。一般の公文書や史料と異なり、文書やメモ、写真、フィルム、音声資料などマルチメディア資料が多い、私信など公開の難しい資料が多い、などの特徴がある。そこで、二〇〇五年三月、図書委員会に「アーカイブズ検討ワーキンググループ」が置かれ、二〇〇六年度には「アーカイブズ部会」が立ち上がり、「民族学研究アーカイブズ」と銘打って整理と公開に向けた作業が始まった。

一方、梅棹忠夫初代館長は長年にわたる自身の記録資料の保管と整理を続けていた。一九九三年の退任後は、「梅棹資料室」とよばれる部屋で、民博顧問として整理を続けたが、その膨大な資料が収められた部屋は、民博のなかではつきりと位置づけられているわけではなかった。

梅棹忠夫アーカイブズの特徴

梅棹が意図的に残した資料はじつに幅



最上位を「フォンド(fonds)」とよぶ階層構造が国際標準だが、階層だけであらわせない資料間の関係はリンクとして表現する必要がある。梅棹忠夫アーカイブズに「文学フォンド」と「生物学フォンド」があるとすれば、両者間にリンクが数多く存在するに相違ない

広く、「記録魔」の面目躍如といえる。フィロドノート、スケッチ、写真などフィロドワークで作られた資料から始まり、アイデアをまとめたカード、それを整理し原稿の段落梗概をしるした「ござね」とよばれるカードも含む。一次資料から二次、三次生成物、最終成果たる著作に至る知的生産活動の記録だ。それに加え、書評や紹介記事などもある。いわば、知的生産から消費まで、情報の上流から下流の大河まで、活動すべてを跡づけることが可能なのだ。対象は、調査探検、学会や学術団体などのほか、文化行政、一九七〇年大阪万博、民博創設準備の諸活動にかかわる資料も含む。梅棹の幅広い関心を反映し分野も多様である。

情報論、比較文明論、女性論、日本論、家庭論、展示論、研究経営論などの研究史資源としても貴重だ。おまけに、館長時代の各種会議資料も几帳面に残されているので、民博の公文書アーカイブズの性格ももち、個人アーカイブズの域を超えている。そこで二〇一一年度から、「梅棹忠夫アーカイブズ研究プロジェクト」が資料の整理保存、目録作成の作業を開始し、劣化の進んだ紙資料のデジタル化とウェ

ブ公開を始めた。

梅棹資料室は、二〇一三年四月に館長直属組織に位置づけられ、それまでの経緯もあって筆者が初代室長を務めた。梅棹の残した資料を整理・保存し、学問の成立過程だけでなく各分野の歴史を解明する基盤として、研究者による参加型・成長型の梅棹忠夫デジタルアーカイブズを構築するのが目的である。

新しい構造のアーカイブズを目指して

一般にアーカイブズの整理は、一九九四年に制定された国際標準に基づき、物理的、あるいは意味的な階層構造を前提とする。しかるに梅棹の知的生産は、周知のとおりアナロジーによる発想に基づくことが多い。「情報産業論」のように、文明の発達を動物の発生活過程とのアナロジーでとらえるのだ。つまりこのアーカイブズに含まれる資料間には、階層関係ではとらえきれない、梅棹の自由な発想の元となった相互関連があるはずだ。それを解き明かすには、階層と関連性リンクを組み合わせた構造をもち、梅棹忠夫アーカイブズを整理しているアーキビストの知見や、研究者が発見した関連性を反映させていく仕組み、いわば、利用者の参加による成長型のアーカイブズが望ましい。これは、梅棹が奨励した共同的な知の創造にかなう。こうした新しいタイプのアーカイブズを試作し、民博の公文書アーカイブズを含む他分野のアーカイブズへも応用可能なことを示していくことを、筆者としては後続に大いに期待している。

今日の 知的生産の 手法

堀正岳 研究者・プログラマー

梅棹忠夫の卓抜した民族学的才能を手元で支えていたのが、B6サイズの情報カードやござね法といった、情報を扱いやすく収集・編集する「知の技法」だった。



Evernoteで新聞記事をスクラップした画面

たことは広く知られている。そんな梅棹が、今活躍していたなら、どんな技法を生み出していただろうか。

今日、学者のみならず一般の人びとも悩ませているのは、インターネットの発展による情報の爆発だ。ネットの情報をおいかにして使いこなすかは、まさに現代のフィロドワークの技法といってもいい。しかし手に入る情報がいかに多くなったとしても、梅棹の情報カードにみる情報の原子化と、ござね法にみられる異なる情報の並び替えから新しい情報を生み出す手法は、原則に変わりはない。ツールをネットに対応させればよいのだ。

ネット時代の情報カード

例えば、ネット上で利用できるメモツールであるEvernoteは、文章やウェブページ、写真などをなんでも保存してくれる、まさにデジタル時代の情報カードだ。Evernote上の情報はスマートフォンからも閲覧可能なので、発想が浮かんだときいつでも手元に引き出せるというメリットもある。また、写真や手書きのスケッチ、音声の録音といった情報をいつでも追加することも可能だ。ネットにある情報は、ネット上のツールであるEvernoteで収集・整理するのがいちばん扱いやすい。

現代のツールは新しい知的生産の技法も可能にし



梅棹資料室のキャビネットに収められている、梅棹が作成したB6カード。これらは「知的生産の技術」のもとになった

ている。例えば広く使われているMicrosoft WordやGoogleドキュメントのようなツールも、複人数で同時に編集することが可能になっている。書いた草稿をいちいちやりとりせずとも、オンラインでチャットを開き、離れた場所にいる相手と議論しながらリアルタイムで論文を手分けして執筆するという作業方法もすでに一般的だ。技術的なハードルがなくなり、コンピュータ端末とネット環境さえあれば、どれだけ離れていても共同して知的生産を実践できる、夢のような時代といつていい。

しかし重要なのは、これらの手法が梅棹の実践した情報カードや知的生産の技術と置き換えられるものではないという点だ。いくら多くの情報がネットでも検索できても、古い資料や文献が散逸するのと同様に、ネット上の情報もまた日々失われている。むしろネットの時代だからこそ、あとに証拠も残さず消えてゆく情報の海から知見を救い出す新しい手法が問われているといつていいだろう。集めた情報から新しい情報を生み出す創造性は、古いツールと新しいツールの共演によってこそ成し遂げられるのだ。

学術探検と知的生産

一九五五年の「京都大学カラコラム・ヒンズークシ学術探検隊」は、カラコラムとヒンズークシというふたつの山岳地帯を舞台としたスケールの大きな学際的調査だった。後年のユーラシアにおける農牧文化複合の研究やアフリカでの霊長類・生態人類学などがここから派生していくのであり、まさに「日本のフィールドサイエンスの原点」とよべるだろう。

この京大による調査から三〇年後にわたしはカラコラムに足を踏み入れ、足かけ一〇年にわたってフィールドワークをおこなった。当時、中国とパキスタンを結ぶ幹線道路が開通したことで、カラコラムは商業

ルートならびに観光地として脚光を浴びつつあった。住民参加型のNGO活動が活発になり、人びとの生活には大きな変化が訪れていた。学術調査に関しては、Culture Area

(CARK) というドイツ人による大型プロジェクト（一九八九〜九八年）が行われており、複数の谷のあちこちに、自然地理学、文化人類学、言語学等の研究者を長期滞在させて、環境と文化

の相互作用を解明しようとしていた。CARKのメンバーとは何回も顔を合わせ、たがいの調査テーマについてよく議論したものである（わたしの初めての英語論文はCARKの論文集に収録された）。じつ

は京大と同時期に、ドイツ人もカラコラム探検を始めており、CARKはその発展形であった。

多様な成果とその価値

一九九〇年代末に至って、ドイツの学際研究がようやくひとつの到達点を迎えたことを考えれば、まったくの手探り状態でおこなわれた一九五〇年代の一度の探検から、植物学や地質学の英文報告書のみ



NGOが女性による手工芸作りを推進し、地元のお土産として販売されている。日本人観光客に向けた看板もある（パキスタン、フンザ谷、2003年）

門の違う友人間で共有財産としていたことがわかる。異分野のメンバー同士が、それぞれの発見をもとに、現場で自由闊達に議論する。これこそが京大探検隊の最大の強みだったのでないだろうか。

今回、この小文をまとめるにあたり、DVDブック『カラコラム／花嫁の峰 チョゴリザー——フィールド科学のバイオニアたち』（二〇一〇年、京都大学学術出版会）、CARKの論文集、そして自らの博士論文まで引っぱり出して目をとおした。その作業をとおして、「大きな研究テーマを設定し、常に新しい発見をめざすべし」と意をあらたにすることとなった。「京都大学カラコラム・ヒンズークシ学術探検隊」は、研究者のインスピレーションの源泉として、これからもその価値を保ち続けることだろう。

東南アジア学術調査

信田敏宏

民博 グローバル現象研究部

梅棹忠夫の「移動研究室」

一九五五年、カラコラム・ヒンズークシ学術探検から帰国した梅棹忠夫は、まもなくして、当時所属していた大阪市立大学が派遣する東南アジア学術調査隊に参加することとなった。準備に追われるなか、一九五七年二月には、カラコラム・ヒンズークシ学術探検から着想を得た「文明の生態史観序説」（後の『文明の生態史観』の元になる論考）を発表し、一躍時の人となったのである。そして、同年一月、三七歳の梅棹は、第一次大阪市立大学東南アジア学術調査隊の隊長として、タイに向け出発したのである。

一九五七年は、戦後日本における東南アジア研究の始まりの年であった。この年、梅棹の調査隊より少



梅棹が「移動研究室」と称した三菱製ジープ。3台の車それぞれに調査に必要な道具一式を備え、いずれも独立した研究室として行動できるようになっていた（X0244658、タイ、1957年、「梅棹忠夫アーカイブズ」より）

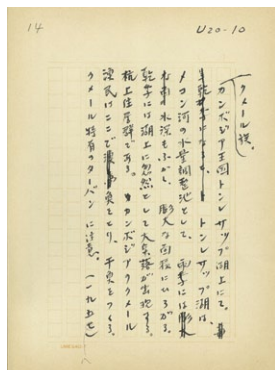
し早く、日本民族学協会が派遣する第一次東南アジア稲作民族文化総合調査団が、メコン川流域を中心とするタイ、ラオス、ベトナム、カンボジアで調査を実施していたのである。団員には、綾部恒雄、岩田慶治などが参加していた。約六カ月の滞在期間、梅棹はタイを拠点にジープで駆けめぐったそうである。当初は、アンコール・ワットを訪れたり、タイのチェンマイまで足をのばし、カレンの人びとの村などを訪問している。その後、石井米雄を通じて迎え、カンボジア、ベトナム、ラオスをめぐる調査旅行に出ている。

フィールド調査と読書

旅の移動中、梅棹は「移動研究室」と銘打って、ジープに積み込んだD・G・E・ホルの『東南アジア史』（一九五五年）などの基本文献を車内や宿泊先で読み進めていたという。フィールドでの読書は、研究室や書斎での読書とは違い、現場で実際に確かめられるという利点がある。膨大な文献の渉猟とフィールドでの研ぎ澄まされた感覚、そして、さらなる情報収集。



1957年、梅棹がカメラにおさめたうちの1枚。カンボジアのトンレサップ湖上で撮影された写真からは、クメール族の日常生活が垣間見える。右は、写真展「民族学者 梅棹忠夫の眼」（1982年開催）の際に梅棹が書いた解説原稿（左：X0223585、ともに「梅棹忠夫アーカイブズ」より）



幾重にも重ねあげるデータと、そこから編み出されていく理論が文明に対するより深い洞察につながったのであろう。

このときの調査を基に執筆した『東南アジア紀行』（一九六四年、中央公論社）において、梅棹は、「移動研究室」をはじめとしたさまざまな興味深いエピソードとともに、調査隊の活動や現地での情報収集の方法について余すところなく記述している。梅棹や隊員たちが撮影した写真は、モノクロで約二万コマ、カラーは約二〇〇〇コマという膨大な数にのぼり、そのほか、フィルムや録音テープも残されているという。当時の東南アジアの様子を伝える写真については、その一部が、岩波写真文庫の『タイ——学術調査の旅』および『イ

ンドシナの旅——カンボジア・ベトナム・ラオス』にも一九五八年、岩波書店）にまとめられている。梅棹の写真には、人びとの何気ない日常がおさめられており、ありのままの姿や表情、当時の生活が生々しく写し出されている。文章ばかりでなく、写真にもこだわりを見せた梅棹の研究スタイルは、その後、写真を多用する本誌に受け継がれていったといえるであろう。

ウメサオの霧箱

探検的思考のための装置

『知的生産の技術』のなかで、梅棹は、ひらめきや発見はわたしたちにも日々訪れるが、すぐに消えてしまう。これらをきちんととらえて自分の思想の素材に育てるためには、見えない宇宙線の軌跡を可視化するウィルソンの霧箱のような装置が必要だと述べている。わたしは高校一年生で初めてこのことばと出会ったときの感動を、今も鮮明に覚えている。大学で数学とコンピュータ科学を学び、最近二〇年間は、大量の電子情報を人間の創造的思考に生かす情報技術を追求してきたわたしにとって、この「ウメサオの霧箱」は、ひらめきを生み、思考を深める情報環境について考えるための基本的指針となってきた。

今回、企画展「知的生産のフロンティア」の準備のため、梅棹が世界各地のフィールドワークを通じて残した膨大で多様な資料群（フィールドノート、スケッチブック、写真、それらを整理したカード、こざね、著作等）をつぶさに眺める貴重な機会を得た。「梅棹忠夫アーカイブズ」に整理され、蓄えられてきたこれらの資料群について、電子化が進められ、相互の参照関係が機械可読なリンクで整理されることにより、これらの資料群こそが梅棹の発想の源泉だったことを強く実感した。

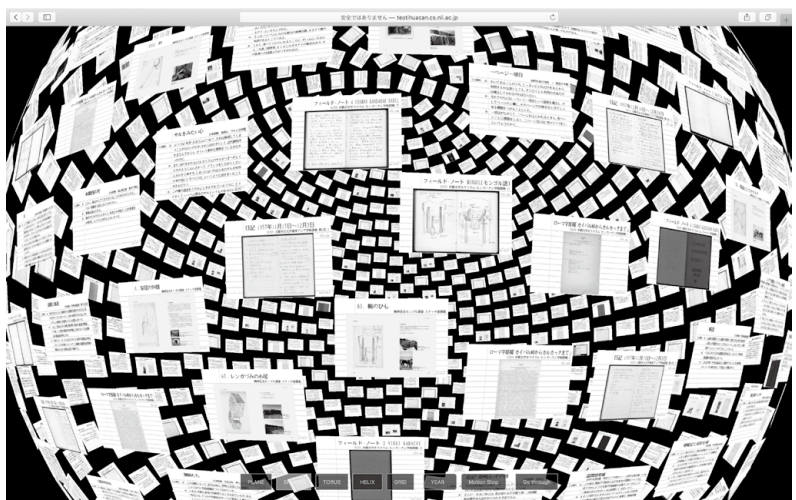
梅棹の探求スタイル

「霧箱」に、梅棹は何を溜めて、何を見てきたのか

えたひらめきを記録して霧箱に溜め込み、それを使って次の発見を探るのである。ある霧箱で見えたものに基づいて、次の思考のための霧箱が作られる。「霧箱サーフィン」ともよべるこのダイナミズムこそが梅棹の真骨頂だったと感じる。

情報の百科事典

情報の整理と活用法については、一九四五年にヴァネヴァー・ブッシュが提案したメモックスが有名だ。マイクロフィルムに記録された膨大な情報を活用して



企画展で公開予定の「梅棹忠夫アーカイブズ・クルーズ」(開発:阿辺川武、2020年)。球やトラスの形に配置された梅棹関連資料群を3D空間で自在に操作しながら、資料の選択や並び替えによってあらたな関係性を探るシステム。個々の著作や関連資料をeReader(下図)で開いて、詳しく閲覧することもできる

たかの あきひこ
高野 明彦 国立情報学研究所教授

ろうか。「発見の手帳」こそが自分にとつての霧箱であり、一枚一項目主義で書き込むカードの集まりが「手帳」の新しい形だと説明している。あるときは、キャラバンの車に揺られながら、目や心に映るものを次々とローマ字のタイプライターで打ち込む。出会った人びとや出来事をスケッチや写真の形で記録する。またあるときは、持参した書物を読み進めながら、それまでに記録した写真やスケッチと文献に書かれていることの新しい結びつきに興奮する。もちろん、自分が書き溜めてきたフィールドノートを読み返すことで、目の前の事物と過去に撮った写真が結びつくこともある。

このようにカードやこざねを駆使して、霧箱の中身と観測する対象を、いつでも自在に入れ替えながら、「考え・書き・読む」という活動を切れ目なく繰り返している姿が目には浮かぶ。自分がとら

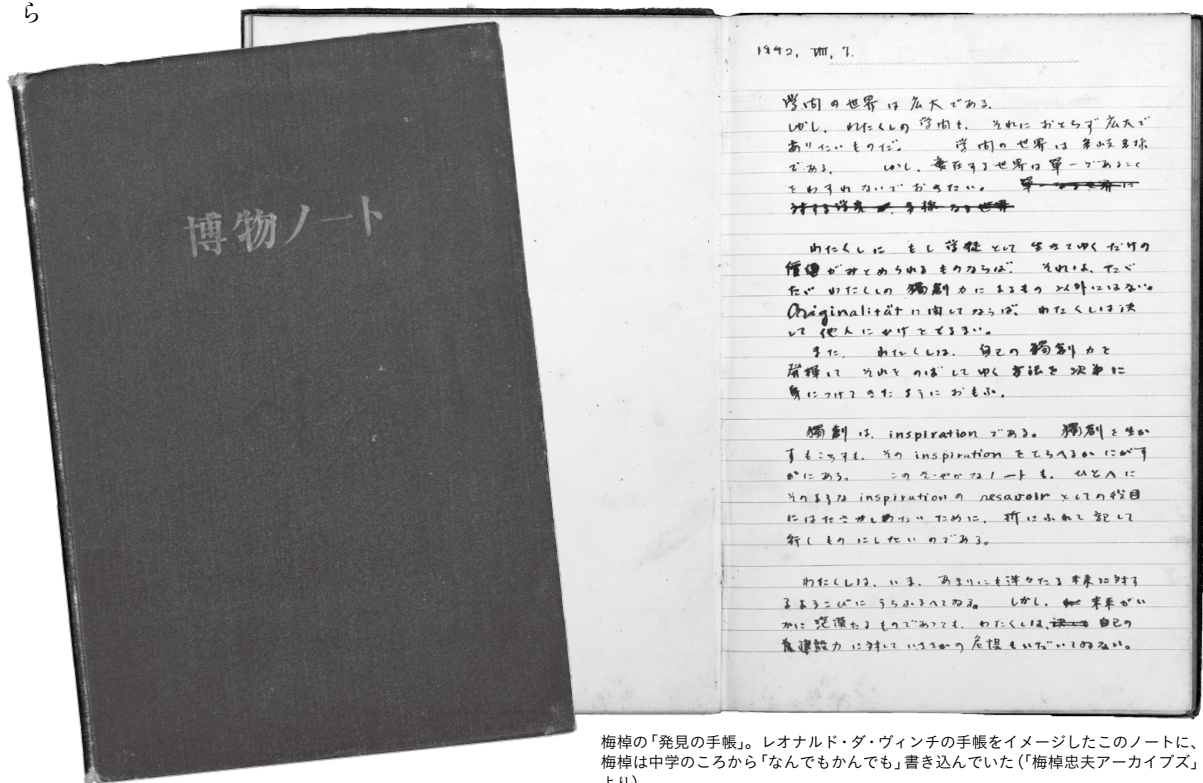
人間の記憶を拡張するシステムが図解入りで提案され、それが現在のハイパーテキストやウェブの発明に概念的な基礎を与えたといわれている。当時、米科学研究所開発局長としてマンハッタン計画の推進に深くかわり、全米科学者の三分の一を指揮していたブッシュの傲慢ともいえる全能感と、人類の科学的な全知識を百科事典のように整理してマネージしたいという強烈な欲望を感じる。

メモックスやその影響を強く受けて発達してきた現在の情報技術は、できるだけ多くの知識を収集整理して、それらの体系化を進めることを目標にしている。そこでは、属人的ではない形で考えの機序や根拠が示され、第三者がいつでもその正当性を確認できることが重視される。ハイパーテキストやハイパーリンクは、このような静的な関係性を表現する仕組みとして導入されてきた。

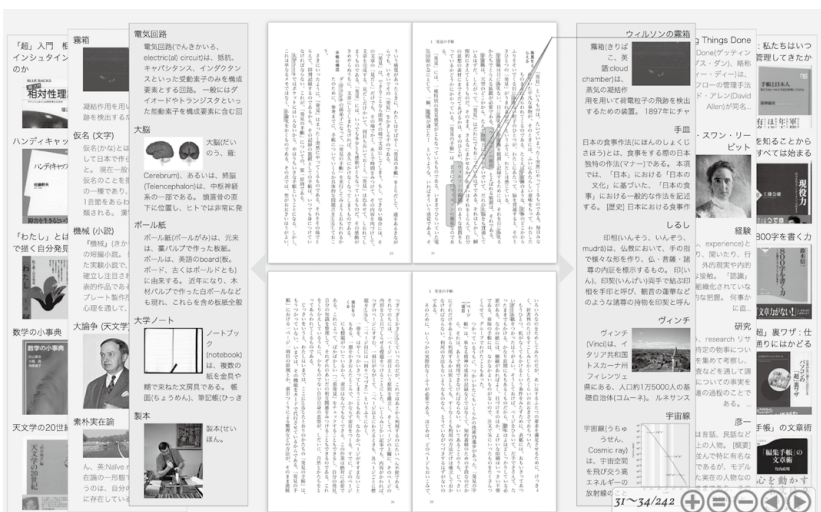
体系化の先へ

『知的生産の技術』に書かれた梅棹の提案を、B6判カードの採用やローマ字記述による情報整理法と、こざねを活用した文章作成術として要約するのはおそらく間違いである。この本の最大の貢献は、彼の生涯にわたるフィールドワークを実例として説かれる探検的思考の方法論である。フィールドにおける体験や観察を、「考え・書き・読む」という活動の切れ目ない繰り返しにうまく接合する「ウメサオの霧箱」は、探検的思考のための装置に他ならない。

しかし、探検的思考のダイナミズムを表現するメディアとして、現在主流のハイパーテキストは不十分である。知識と知識の関係性として静的な関係づけ



梅棹の「発見の手帳」。レオナルド・ダ・ヴィンチの手帳をイメージしたこのノートに、梅棹は中学のころから「なんでもかんでも」書き込んでいた(「梅棹忠夫アーカイブズ」より)



「eReader読書環境」で梅棹の著作を読む。著作の本文を他の資料や百科事典等の外部データベースと自動的に関連づける。辞書引き関係だけでなく、内容的な類似性をとらえる連想検索も利用できる

しか記述できないことが本質的な制限となっている。探検的思考の主体が自分の脳に溜め込んでいる記憶の違いや、分析対象として取り上げる体験の組み合わせの違いなどにより、「霧箱」でとらえるべき知識間の関係性は動的に変化するものが自然だからである。対話しながら、思い浮かべている景色が変化していく様子をとらえられるような情報表現法が必要だ。梅棹から我々に託されたこの課題に取り組んでいきたい。

環境・消費について考える —マドリードの一市民として

折井 善果
慶應義塾大学准教授



環境デモに参加してみよ
ムルシア州の湿地マール・メノールの保護団体によるデモ行進 (2019年)

近年、世界各地で異常気象が相次ぎ、地球温暖化が差し迫った問題となっている。我々は地球規模で消費生活を見直す必要に迫られているが、その取り組みの現状は国・地域によって異なるようだ。本稿では昨年 COP25 が開催されたスペインの現状を見てみよう。

わたしは勤務先から二年間の長期出張の機会を得、スペインのマドリード自治大学に所属しながら、近世初期の日本キリスト教宣教師に関する共同研究をおこなっている。出張期間の終わりが近づいてきた二〇一九年二月二日から五日まで、同地においてCOP25(第二五回国連気候変動枠組条約締約国会議)が開催された。産業革命の時代から今世紀末までの気温上昇を二度未満(できれば一五度)に抑えるための政治的合意は、会期延長にもかかわらず先送りされ、「行動のとき」というスローガンは見事に皮肉になってしまった。しかし開催地の市民にとってこの出来事は大きなインパクトを与えたように思う。各国代表者の政治的合意を求める「国際的」市民デモにわたしが参加するに至ったのは、会議場が自宅から徒歩一〇分の距離にあったこと、純粋な好奇心のみによるもので、以下は一市民の追想にすぎないことをお断りしておきたい。

訴える人びと

「地球Aはあっても地球Bはない」、「気候(変動)は今、宿題はあと」、「クールなキッズが地球を救う」など、若者の存在を押し出すスローガンが印象的だ。夕方六時よりほぼ三時間、スペインの首都の大動脈カステイリャーナ通りの、アトーチャからヌエボス・ミニステリオスまでのおよそ五キロメートルを、参加者と語を交えながら北上、行進した。カタルーニャ独立を問う住民投票を決定した同州政府幹部らが、憲法秩序の転覆扇動のことで有罪判決を受けて間もない時期であり、独立派が振る共和国時代の三色旗がかなり目立つ。ほかにも、チベット独立を求める同地域の旗や、最近カステイリャー・イ・レオン州からの分離独立の動きが政治的に具体化したレオンの「県」旗(かつてのレオン王国の紋章が入っている)も入り乱れている。デモ当日の参加者の総計は警察発表では二万五〇〇〇人であったが、その数以上に事態を物々しくしているのは、やはり一六歳の環境活動家グレタ・トゥーンベリ氏を待ち構えるカメラやヘリコプターの旋回音であった(結局、彼女は保安上の理由で行進

自体にはほとんど参加しなかった。アタカマ砂漠の異常な拡大で自給自足の暮らしが維持できなくなったという、チリの先住民のグループ、ラムサール条約に指定されているムルシア州の湿地マール・メノールの惨状を訴える住民、収穫量が前年の二五パーセント減になったというアンダルシア州カディスのオリーブ農園経営者等々、ことばを交わした少なからずの参加者は、思想・信条を表明しに来ているのではない。すでに自らの今日明日の生活に困窮してこの場集まっている。

日常生活での変化

COP25の開催により、主要紙における環境問題関連の記事掲載数はいずれも過去最多を記録したという。しかし官公庁や公的機関などでペトボトル入りのミネラルウォーターは普通に使用されているし、粗大ごみの撤去も無料である。わたしの経験ではビニール袋一枚探すのに苦労したドイツをはじめ、ヨーロッパの環境対策先進国の後追いをしている感はない。一方子どもを通う保育園では、ランチに通常のメニューのほかに「肉なし」という選択肢があった。スペインでは子どもの教育を選ぶにあたって「宗教なし」というチェックボックスがあるが、それと同様の扱いである。また今回の会議にちなんで、保育園ではグレタ氏について学んだそ



マドリードではバス停と使用済み電池収集所がセットに (2019年)

★
スペイン
マドリード



デモの出発地点でごったがえす人波。奥にわずかに見えるのが赤・黄・紫のスペイン共和国旗 (2019年)

うだ(ちなみにこの学びは週一回、ヨーロッパの偉人について学ぶ枠である)。結果、我が家の保育園児は「セーオードセ(OO)」をモンスタードと怖がるようになり、スーパーで肉を買う母親をしきりに非難するようになった。グレタ氏の論調については賛否両論あるが、彼女のそのまた下の世代の子どもにも、ポップ・スター並みの影響力をもたらしたことは確かなようである。恥ずかしながら、わたしは牛肉と環境汚染のつながりなど、想像にさえおよんでいなかった(その意味で、わたしの環境に関する知識は日本の環境大臣にわずか先んじていただけ)。しかし結局、出張中のほぼ二年間で、我が家では綿棒や歯ブラシは竹製、シャンプーや洗剤はすべて固形石鹸に変わり、ザラの服(スペイン発のファストファッション・ブランド)を買いあさる悪癖はいつのまにか消えた。食卓も様変わりし、肉のメニューは却下され、スペインのパラエティー豊かな豆の味を楽しむようになった。国連事務総長のアントニオ・グテレス氏は、会期中の演説で、「わたしたちが緊急に自らの生活(Life)様式を変えなければ、生命(Life)そのものを危険にさらすことになる」と述べていた。手遅れかもしれない。でも沁みついた生活様式を洗いざらい吟味し、あらためて消費社会とは何かを考え始めるに十二分な機会であったことは間違いない。

重要なお知らせ

新型コロナウイルス感染拡大予防のため、本館関連の催し物について、本コーナーに掲載の情報も含め、急遽、予定を変更する可能性があります。詳細につきましては、決まり次第本館ホームページに掲載いたします。何卒ご理解のほど、お願い申し上げます。

■関連イベント
ワークショップ
「ペーパークラフトでテーマボールをつくらう」

カナダの北西海岸先住民の歴史と文化についての解説を聞いた後、本館展示場で実物のテーマボールを観察し、各自が紙を用いてオリジナルのテーマボールを制作します。

日時 5月2日(土)、3日(日・祝)
13時～15時30分(12時30分受付開始)
会場 本館第3セミナー室、本館展示場
講師 田主誠(版画・造形作家)
岸上伸啓(本館教授(併任))
対象 小学生以上

(小学3年生以下は保護者同伴)
※要事前申込(先着順)、定員各回25名、参加費300円、要展示観覧券
※受付期間 4月2日(木)から

「みんなくSama-Sama(サマ・サマ)塾 プレゼント企画」

みんなくSama-Sama塾塾生によるプレゼント企画。スタン・ラリーを完成させた観覧者に、塾生たちが景品をプレゼントします。

日時 4月25日(土)14時～
5月24日(日)13時
会場 特別展示館
対象 どなたでも

(景品が無くなり次第終了)
※申込不要、参加無料、要特別展示観覧券



彫像
(マレシア オラン・アスリ)

梅棹忠夫生誕100年記念企画展
「知的生産のフロンティア」

みんなく初代館長を務めた梅棹忠夫が残したアーカイブズ資料とデジタルデータベースをおして、フィールドワークから著作への「知的生産」をくわしく紹介します。

みんなくゼミナール

日時 4月18日(土)13時30分～15時(13時開場)
会場 本館講堂

※申込不要、参加無料

第501回
アイヌ文学の世界——韓・日との比較

講師 北原モコツトウナシ
(北海道大学アイヌ先住民研究センター 准教授)

齋藤玲子(本館 准教授)

アイヌ民族が伝承してきた物語は、登場するキャラクターや語り方などによっていくつものジャンルに分けられてきました。朝鮮半島や日本の物語と比較し、共通点や違いについて考えます。



「世界のはじまりの話」
絵：小笠原小夜

みんなくウィークエンド・サロン
研究者と話をう

本館の研究者が「現在取り組んでいる研究」「調査している地域／国の最新情報」「みんなくへの展示資料」について分かりやすくお話しします。

4月5日(日)14時30分～15時15分 特別展示館
サーミの工芸品

話者 庄司博史(本館名誉教授)

4月12日(日)14時30分～15時 特別展示館
ネパールの先住民運動

話者 南真木人(本館 准教授)

4月19日(日)14時30分～15時15分 本館ナビひろば
台湾原住民運動40年

——「高山書」から移行期正義まで

話者 野林厚志(本館 教授)

4月26日(日)14時30分～15時 本館ナビひろば
アフリカの先住民について

話者 池谷和信(本館 教授)

※申込不要、参加無料(要特別展示または展示観覧券)

会期 4月23日(木)～6月23日(火)
会場 本館企画展示場



フィールドノートを内容別に転記したローマ字カード
(写真撮影 尼川匡志)

ワークショップ
みんなくおはなし会
「絵本のなかのほんものを見よう——中央北アジア編」

世界を舞台とする絵本の読み聞かせを行います。絵本を読んだあとは、絵本に登場する生活道具や衣装を、展示場へ探しに行きましょう。

日時 4月19日(日)13時30分～14時30分
(13時受付開始)
会場 本館1階エントランスホール
講師 絵本読み聞かせ・上野恵子(山田駅前図書館 司書)
展示場解説：大石侑香(本館 特任助教)

対象 小学生向け、希望者はどなたでも参加可(未就学児は保護者同伴)
定員 20名程度
※申込不要、参加無料

(大学生以上は要展示観覧券)

「みて、ふれて、つくって 世界のビーズ」
アフリカでつくられたビーズ製の帽子や首飾りなどの装飾品にふれたり、カラフルな古紙をつかったペーパービーズづくりを体験できます。

※各イベントについてくわしくは、みんなくホームページをご覧ください。
※電話でのお問い合わせの受付時間は、9時～17時(土日祝を除く)です。

巡回展
「特別展 驚異と怪異——モンスターたちは告げる——」

会期 4月25日(土)～6月14日(日)
会場 兵庫県立歴史博物館 特別展示室
休館日 月曜日
5月4日(月・祝)は開館

主催 兵庫県立歴史博物館 神戸新聞社
国立民族学博物館 千里文化財団
兵庫県 兵庫県教育委員会
NHK神戸放送局
サンテレビジョン ラジオ関西
協力 山陽電気鉄道株式会社
神姫バス株式会社
特別協力 ライデン国立民族学博物館

刊行物紹介

■鈴木 英明 編著
『東アジア海域から眺望する世界史——ネットワークと海域』
明石書店 3,800円(税別)

21世紀に入りグローバル化が進展するなかで、従来の一國史をはじめとする既存の歴史単位に依らない新たな歴史像が模索されている。海を中心とする歴史——海域史——はそのような新たな歴史像構築への貢献を期待され、2000年代以降、歴史学のなかで大きく発展してきた分野である。本書では、その到達点に立ち、海域史研究の新たな可能性をネットワーク論の観点から模索します。



国立民族学博物館友の会 電話 06-6877-8893 (9時～17時、土日祝を除く) FAX 06-6878-3716
https://www.senri-f.or.jp/minpaku_associates/ E-mail minpakutomo@senri-f.or.jp

友の会

友の会講演会

第499回 4月4日(土)13時30分～14時40分
「特別展先住民の宝庫」

講師 岸上伸啓(本館 教授(併任))

会場 本館第5セミナー室(当日先着96名)

※会員無料(会員証提示)、一般500円

※講演会終了後、特別展の見学会をおこないます(40分/要会員証もしくは特別展示観覧券)。

第500回 5月9日(土)13時30分～15時

「梅棹忠夫生誕100年記念対談」
知的生産のフロンティアの原点
探検家 梅棹忠夫を語る

話者 石毛直道(本館 第3代館長)、吉田憲司(本館 第6代現館長)
フアンリテーター 飯田卓(本館 教授)

会場 本館講堂(要事前申込/先着450名)
みんなく初代館長 梅棹忠夫は、知的生産的活動において常に新領域を開拓し続けました。知的生産のフロンティアを歩きつづけた梅棹忠夫ですが、研究の根は山からはじまり、その原点は探検にあると述べています。本講演会では、探検家としての梅棹忠夫に焦点を当て、石毛直道第3代館長と吉田憲司第6代現館長の対談をおおしてその思想の源をさぐります。

※参加無料
※講演会終了後、会員限定で懇談会をおこないます。

東京講演会

第129回 4月29日(水・祝)13時30分～14時40分
アンデス高地の教会に集つ人びとと祭りのすがた

講師 八木百合子(本館 助教)

会場 モンベル御徒町店4Fサロン(要事前申込/先着60名)
南米ペルーの山岳地帯には、キリストや聖母を祀る数々の聖地が存在します。祭りの時期には、聖地の教会を指して大勢の人が集まり、さまざまなお祭りがおこなわれます。聖地の名声が高まり、巡礼者の数が増えるにつれて、祭りの様相やそのあり方も大きく変化してきました。本講演では、祭礼を支える仕組みを紐解きながら、現代のアンデスの祭りのすがたについて紹介します。

※友の会 モンベル会員無料(会員証提示)、一般500円
※講演会終了後、講師を囲んで懇談会をおこないます(40分)。

日時 4月24日(金)、25日(土)
10時～17時(16時30分受付終了)
会場 本館1階エントランスホール
対象 どなたでも
※申込不要、参加無料

みんなく春の遠足 校外学習事前見学&ガイダンス

春の遠足 校外学習にむけて、事前見学に来館される学校団体の先生方を対象としたガイダンスを開催します。

日時 4月6日(月)、7日(火)
14時～16時30分
(13時50分～16時受付)

会場 本館第5セミナー室

※参加無料
ホームページから参加申込書をダウンロードし、必要事項を記入の上、FAXにてお送りください。

お申し込み・お問い合わせ先
国立民族学博物館 案内所
電話 06・6878・8341
(10時～17時)
Fax 06・6878・8441

●みんなく無料シャトルバスのご案内
大阪モノレール「万博記念公園駅」とみんなくの間の直通送迎バスを特別展「先住民の宝」の会期中に運行します。

運行日 会期中の土曜・日曜・祝日
1日11往復、所要時間10分、無料
連休日 平日、4月25日(土)、4月26日(日)、4月29日(水・祝)、5月2日(土)
※万博記念公園でイベントが開催される場合は臨時に運休することがあります。詳細はみんなくホームページをご覧ください。



世界の バスケットリー × バスケットリーの 世界

籠だけじゃない

上羽陽子 民博人類文明誌研究部

本号から、多様なバスケットリーの世界を紹介するコーナーが始まった。一見、バスケットとはかけはなれて見えるものや、その意外な用途まで、毎号、世界各地の事例を取り上げる。初回ではバスケットリーの定義と歴史を概観し、今日のバスケットリーを考える基礎を固めたい。

バスケットリーとは何か

バスケットリーとは、文字どおりのバスケットなどのカゴ類、あるいはバスケットをつくる技法を意味する。広義では、たわみやすい線状物を製作し、それを材料として、編み・組みの技法でつくられたもの一般を指す。このようなバスケットリーは、農具や漁具、運搬具や台所用品などとして、かつては人びとの暮らしに欠かせないものであった。

バスケットリーのおもな素材である植物は腐敗しやすい有機物のため、遺物が現在まで残存することはまれであり、その歴史を辿ることは難しい。バスケットリーの圧痕は、二万六〇〇〇年前のチェコの後期旧石器時代のドルニイヴェストニツェ遺跡から出てきている。日本でも、最新の考古学成果のある、縄文早期後葉の佐賀の東名遺跡からは、総数七三二点のカゴの遺物が発掘された。そこでは、カゴの素材となる植物資源の管理もしていたことが明らかとなっている。さらに、先史時代の

考古遺物の分析から、素材採集の方法や加工技術、編み・組みの技法には、現代に至るまで連続性が認められることが判明している。

バスケットリーの製作技術は、シンプルではあるものの、その技術を使って大きな構造物もつくることができる。そのため、バスケットリーには、カゴ類だけでなく、植物の部位からつくられる家や壁、舟や橋なども含まれる。

例えば、インド北東部メガラヤ州では、世界有数の多雨地帯で暮らすカシの人びとが、ゴムの木の根を利用して、橋をつくっている。この地域は降水量が多く、川の増水が激しいため、通常の橋では流されてしまう。そこで彼らは暴風雨や鉄砲水にも耐える橋をつくるようになったという。タケ製の足場にそって、木の根を編み・組みするようになり、絡み合わせてつくられる橋は、大きなバスケットリーともいえるだろう。

植物素材でものをつくる必要性とは

わたしたちが使っている虫カゴ、洗濯カゴ、自転車カゴからもわかるように、バスケットリーはなかに入れるものを傷めずに運搬する機能がある。この機能をそなえるためには、素材に一定の強度

があるとともに、たわみをもつ弾性があり、なおかつ軽いことが必要である。先史時代より人びとは、タケやヤシなどこのような特徴をもつ素材を用いてバスケットリーを製作してきた。しかし、現在、多くのバスケット

リーは、同様の機能を兼ね備えた針金製やプラスチック製に取って代わられている。

一方、そうしたなかでも、植物素材によるバスケットリーは、植物特有の材質や形態、機能などから生業活



上：ゴムの木の根を絡ませてつくった橋（インド、メガラヤ州、2019年）
下：祖先祭祀のために準備された供物（撮影：中谷文美、インドネシア、バリ州、2016年）



タケでつくった壁材が使用されている家屋（インド、アッサム州、2017年）



タケでつくった漁具（インド、アッサム州、2017年）

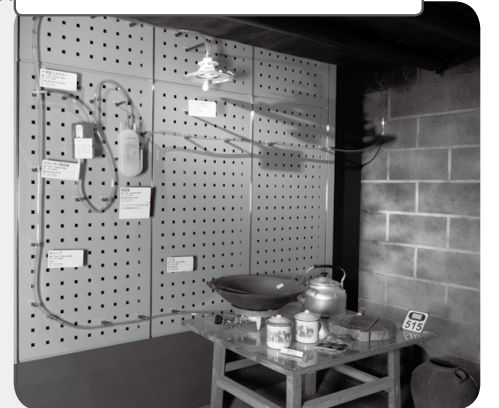
動における農具や漁具、手工芸製作活動における各種道具などで使い続けられている。さらには信仰においても、供物の容器や飾り物などで、人びとの活動に不可欠なものとして扱われている。つまり、工業化された社会において、多くの用具や容器がプラスチック製などに代わったなかでも、植物素材によるバスケットリーのすべてがなくなっただけではない。

本号からはじまったこの新コーナーでは、世界のバスケットリーに焦点をあて、その製作や使用の現場から、植物素材によるバスケットリーがどのようなにつくり・使い続けられているかを紹介する。今なお、植物素材でものをつくる意味について考える機会になればと思う。

台所

おおさわ よしみ
民博 機関研究員 大澤 由実

中国地域の文化展示 「チワン族の高床式住居」セクション



チワン族の高床式住居<再現> (O0001925ほか)

中央・北アジア展示 「中央アジア」セクション

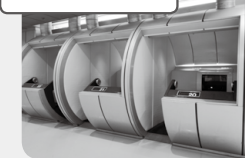


タシュケントの民家の台所<再現> (H0105530ほか)

<本館展示場>

観覧券売場

ビデオテーク



番組番号
1298「アボリジニの小麦粉料理」
1301「カンガルーの石蒸し料理」



東南アジア展示 「村の日常」セクション



囲炉裏を備えた大陸部山地民の台所 (H0275904ほか)

火を扱う

台所で重要な要素は、火と水である。ここでは火の扱いについて東南アジアのタリーの台所、中央アジアのウズベクの台所、そしてビデオテークの映像を例に紹介する。

まず、東南アジア展示場にあるのは、ベトナム北西部に住むタリーの台所の再現である。台所は高床式住居内にあり、そこでは囲炉裏、水入れ、ざる、すりばち、コメ入れ、塩蔵肉入れなど多くの物や道具を見ることが出来る。タリーの主食はもち米である。囲炉裏には、もち米を調理する蒸し器が置かれ、それは三つの石により支えられている。この石は五徳として機能しているだけではない。代々受け継がれているもので、台所の神が宿っているのである。また、

囲炉裏では寒い日に暖をとることが出来るため、人が集まり、ときには儀礼が執りおこなわれる場所にもなる。日本各地のかまどの神のように、アジアでは火や、火を使う場所を重視し信仰の対象とする社会が少なくない。

次に、中央・北アジア展示場を覗いてみよう。ウズベキスタン共和国の首都タシュケントのウズベク人の民家の台所がある。これは一九八〇年代の台所の復元である。大小ふたつのかまどの右隣にはタンディルとよばれる大きなパン焼き窯がある。窯のなかで薪を燃やし、薄く丸く伸ばしたパン生地を内壁に貼り付けて焼くのである。このような壺型の窯は北アフリカから南アジアにかけて広く分布している。日本のインド料理店などで見かけるロティやナン



上：タイ北部民家の台所。火を起こして朝食の準備中 (タイ、ランブーン県、2019年)

下：クロックマイ(木製の臼)と電気調理器での調理。台所にガスはなく、すべて電化されている(タイ、チェンマイ県、2019年)

を焼くタンドールも、この壺型窯の類である。世界には、壺型の窯の他に、食べ物を水平に置いて焼く横型の窯(石窯)もあるが、これらはヨーロッパや中東で発展したものである。縦型・横型など世界のいろいろなデザインの窯の原型は、土中に閉じ込めた熱を利用する土窯だといわれている。みんなのビデオテークでは、アボリジニの料理法として、灰の熱を用いて調理する小麦粉料理(ダンバー)や、アリ塚を使ったカンガルーの石蒸し料理の映像なども見ることが出来る。

台所と環境

一方、環境という側面から見ると台所は、食べるための水や資源、エネルギーが使われ、そしてゴミなどが多く出る空間と

えることもできる。中国地域の文化展示場には、広西チワン族自治区の高床式住居が再現されている。なかに入ると、右奥に台所に関する展示がある。ここで注目したいのが、コン口の火の供給源である。人や家畜の排泄物からメタンガスを発生させ、コン口の火やガスランプとして使うシステムがあるのだ。また、この高床式住居では、人は二階に居住し、一階(地上階)では鶏や豚といった家畜が飼育されている。人の食べ残しを一階の家畜に与えるのである。メタンガスの利用、そして残飯処理の方法から、資源がうまく循環している様子を見ることが出来る。

わたしもタイで調査中に、周りのみんなに従って鶏の骨やら食べ残しを外に捨てることがある。最初こそ罪悪感があったものの、犬や家畜があつという間に食べ尽くす様子を見るとスッキリしたものである。また、卵の殻やバナナの皮など動物が食べないものは、庭や畑の肥やしになる。そのため、帰国後、日本でゴミを収集に出すときの方がなんだか申し訳ない気持ちになるのである。

以上、みんなの台所展示のあれこれを紹介した。他にも、各文化・地域展示における水の調達・貯蔵法、作る・食べるための数々の道具、家屋における台所の方位や食事や団欒をする場所との空間的な関係性など、ぜひさまざまな視点から台所文化展示をご覧ください。



ようやくあらわれた、
自己批判の芽

停滞するパレスチナ映画

「昨日、イランやレバノンなど中東発の映画が話題になり、興行的にも成功しているのは、嬉しい限りである。じつはパレスチナ発の映画は、それに先だってかなり早い時期から紹介されてきた。二〇〇〇年代以降も、ハーニー・アブー・アサド監督の『パラダイス・ナウ』（二〇〇五年）と『オマールの壁』（二〇一三年）が注目を浴びた。前者は当時頻発していたパレスチナの若者によるイスラエル国内での自爆、後者はイスラエルの密告者に仕立てられた若者の苦悩を扱っている。ことに前者は、パレスチナ映画の白眉といってよい作品だ。ところが後者を観たとき、わたしはかなり失望した。その理由を述べるため、すこし背景を説明したい。

イスラエルとの関係上、パレスチナ映画は政治的にならざるをえず、イスラエルへの抵抗の手段として映画が製作されてきた。観客として想定されたのはいうまでもなく、パレスチナ・アラブの一般市民ではなく、パレスチナ・イスラエル問題に関心をもつ海外のひととである。初期のうちは、イスラエルの占領政策を批判するだけでじゅうぶんであり、観客もそれを求めた。しかしながら占領から七〇年以上を経て、いつまでもそれでよいのか。

現在のパレスチナ自治区は、停滞している。海外か



敬虔なゼイナブ(中央)と薬物中毒のサフィア(左)。2人の掛け合いが、パレスチナ社会の暗部を浮き彫りにしてゆく(配給:アップリンク)

菅瀬 晶子
民博 超域フィールド科学研究部

「ガザの美容室」

原題: Dégradé

2015年/パレスチナ・フランス・カタール/アラビア語/84分

監督: タルザン・ナーセル、アラブ・ナーセル

出演: ヒヤーム・アッパース、マイサ・アブドゥルハーディほか



登場する女性たち。中央のヒヤーム・アッパースは、ハリウッドの大作にも出演するパレスチナを代表する俳優の1人(配給:アップリンク)

ユダヤ人国家樹立をめざすシオニズムを掲げたユダヤ人入植者と対峙することによって、はじめてアラブ人のあいだで共有された。ところがいつしか皮肉にも、イスラエルを否定することが、パレスチナ・アラブのアイデンティティを表明する手段になってしまった。パレスチナ映画も同様である。

自爆や暗殺で自己の絶望を表現しても、後に残るのは負の感情と報復の連鎖のみ。それを描いておきながら、結局すべてをイスラエルの占領のせいと結論づけた「オマールの壁」は、停滞しきった現在のパレスチナの限界をも提示している。自己批判なき練り言に満ちたパレスチナ映画に、観客はただ息苦しい思いをするだけで、もはや共感を抱けない。もし映画で現状への抵抗を示そうとするならば、パレスチナの問題を普遍性ある物語として提示する必要があるのではなからうか。それをはじめて感じることでできたのが、今回取り上げる「ガザの美容室」である。

舞台劇のように
やわらかな午後の光に包まれる美容室。二人の美容師と、女性客たちがおしゃべりを交わす。しかし美容師の一人がマフィアの一味である恋人に、電話で別れ話を切り出したことから、美容室は一転

して危機に陥る。逆上した男の身勝手な行動が、ガザを支配するイスラーム主義政党ハマース政権とマフィアの抗争に発展してしまい、女性たちは停電した美容室に閉じ込められてしまうのだ。「ガザの美容室」は閉塞的なガザの状況を、政治腐敗やジェンダーギャップ(男女格差)など世界が抱える普遍的な問題に通底するものとして、舞台劇的な手法で描いてみせた。

本作が既存のパレスチナ映画と一線を画しているのは、イスラエルという単語は数えるほどしか登場せず、女性たちを抑圧するのは同じパレスチナ・アラブの男たち、すなわち美容師の粗暴な恋人であり、彼が属するマフィアであり、マフィアを殲滅しようとするハマース政権、さらにはハマースと対立する自治政府である。登場する女性たちの描写も、一般的なパレスチナの女性像からは大きく逸脱している。一夜の火遊びをもくろむ離婚調停中の中年女性に、ハマースに反発するヒジャーブ姿の女性。なかでも中世演劇における道化の役割を担っている、薬物中毒の女性の毒舌ぶりは、いちいち正鶴を射いて痛快だ。女性が舵取りをすればもつとよい世の中になるはずと、彼女が客たちそれぞれに大臣の役職を割り振ってゆく場面は見ものである。

しかしながら結局、非常事態に結束していたかみえる女性たちのあいだにも諍いが起こり、男性の乱入によって、つかの間の不自由で自由な楽園は終焉を迎える。救いのない物語のようではあるが、自己批判精神に満ちた本作に、わたしはかえってパレスチナ映画のあらたな表現への希望を、かすかに見いだした。

ことばの迷い道

世界でいちばん(?) 複雑な声調体系をもつ言語

うちほら ひろと
内原 洋人

メキシコ国立自治大学

動詞の人称変化と聞いて何を思い浮かべるであろうか。大学の第二外国語でスペイン語やフランス語、ドイツ語をかじった方々はピンとくるかもしれない。スペイン語の *hablo* 「わたしは話す」、*hablas* 「君は話す」、*habla* 「彼は話す」……とやるあれである。試験のために人称活用を覚えるのに苦労した思い出がある方も多いかもしれない。ここメキシコで話されるトラパネク語(話者たち自身は「メパー語」という呼称を好む)も、動詞の人称活用をする。例えば、「縛る」という動詞の活用は次のとおりである。ニラフマー「わたしは縛った」、ニタラフマー「君は縛った」、ニラフマー「彼は縛った」、ニラフマー「君を含む我々は縛った」、ニラフマー「君を含まない我々は縛った」、ニラフマー「君たちは縛った」、ニラフマー「彼らは縛った」。あれ、「君は」以外全部同じではないか。これでは日本語と変わらないのではないか。でも共同研究者のグレゴリオ氏は違うという。この種明かしは後ほど。

メキシコと聞いて皆さんは何をイメージするだろうか。残念ながら、治安について不安を抱く方が多いかもしれない。しかし、わたしはメキシコ市に五年住んで地下鉄で一度スリに遭った程度である。もう一度はケータイを盗まれそうになったが、チェーンでズボンに括り付けておいたので未遂で終わった。トラパネク語が話されるのは、メキシコ中部ゲレロ州の山間部、トラパ市周辺である。わたしの勤務するメキシコ市からバスで六時間ほど、その先には世界的に有名な観光地アカプルコがある。今は世界一危険な観光地ともいわれることもあるが、何度も行ったらわたしからすると、少なくとも観光エリアはそんなことはない。ただし、ゲレロ州山間部は本当に危ないと聞く。話者向けワイクシヨップをやってくれと頼まれたときも、正直躊躇

した。でも話者たちが是非と書いてくれているのである。これは言語学者として断るわけにはいかない。あの程度の覚悟はしつつ、わたしは三時発トラパ市行きバスに乗り込んだ。朝六時ごろ到着すると、すでに共同研究者のグレゴリオ氏が待っていてくれた。朝四時から張り込んでいてくれたという。その後四日間トラパ市周辺に滞在することになるのだが、グレゴリオ氏の同伴なしでホテルから出ることは一瞬もなかった。ワイクシヨップでは、遠く日本からやってきた言語学者がわざわざ来てくれたということで歓迎していただいた。お礼にということでホテル代と四日間の食事をすべてカンパしてくれたうえ、最終日には当地の名産である手作りの小さい椅子までいただいた。治安や貧困の問題に悩まされつつも、どこまでも情に厚いトラパネク族である。

上述の動詞活用について、種明かしをすると、カナでは表記できないのだが、じつは声調が違うのである。そう、トラパネク語は中国語のような声調言語なのだ。先の「縛る」を声調も含めて表記すると、次のようになる。nirahmaa, nitarahmaa, nirahmaa, nirahmaa, nirahmaa, nirahmaa, nirahmaa (声調は三つあって、高、中、低である。それぞれ a, a, a のように示す)。書いてあればそれなりに区別できるが、これを聞いただけではべて区別するのは至難の業である。そんなこともあって、トラパネク語は世界でいちばん複雑な声調体系をもつ言語ともいわれる。わたしの印象でいうと、まあ複雑ではあるけれど、世界一は言い過ぎかもしれない。世界一危険かもしれない観光地の近くで、世界一情に厚いかもしれない民族により話される、世界一複雑かもしれない声調体系をもつ言語を研究できるのも、メキシコを離れられない理由のひとつである。

編集後記

本号の特集を機に『知的生産の技術』を読み返した。大学1年以來で、引かれた傍線に、もう一人の自分に会うような感覚を覚えた。「情報科」という科目の到来を予言するなど、この本はコンピュータ時代を先取りしていたことに気づかされる。企画展「知的生産のフロンティア」は、時代がやっと追いついた梅棹忠夫の思索の流儀をあらわすものになろう。

昨年、1958年におこなわれた西北ネパール学術探検隊のデータカード約6600枚をアーカイブとして公開した。見出しなどはホームページでも見ることができ、エクセル上で牧畜、祭礼等々の主題ごとに並べ換えもできる。梅棹忠夫の盟友、川喜田二郎がパンチカードで検索するために、カード1枚1枚にHRAFの文化項目分類番号を付けておいてくれたおかげだ。この先、手作業の分類も人工知能がやってくれる時代がくるのだろうか。

今号から新たな連載「世界のバスケットリー×バスケットリーの世界」が始まった。籠だけでなく、植物の線状物を用い、編み・組みの技法で作られたものが扱われるという。産業革命は織機から始まったが、パンチカードもそこから派生したものだ。人類の英知バスケットリーと知的生産は、規格化という点で深いところまでつながっている。(南真木人)

●表紙：「梅棹忠夫アーカイブス・クルーズ」で見るB6カード
 (制作：阿辺川武)

次号の予告

特集
「釣り」(仮)

みんぱくをもっと楽しみたい方のために 国立民族学博物館友の会のご案内

友の会は、みんぱくの活動を支援し、博物館を楽しく積極的に活用するためにつくられました。

毎月『月刊みんぱく』をお届けするほか、さまざまなサービスをご用意しております。

維持会員・正会員

『月刊みんぱく』の送付／友の会機関誌『季刊民族学』の送付／本館展示の無料観覧／特別展観覧料の割引／友の会講演会への参加／研究者同行の国内外研修旅行への参加 など

ミュージアム会員

『月刊みんぱく』の送付／本館展示の無料観覧／特別展観覧料の割引／友の会講演会への参加 など

繰り返し入館できる**みんぱくフリーパス**や、学校・学部単位で利用できる**キャンパスメンバーズ**など各種会員種別もごさいます。目的にあわせてご利用ください。

詳細は、一般財団法人千里文化財団までお問い合わせください。
 (電話 06-6877-8893 / 平日9:00～17:00)



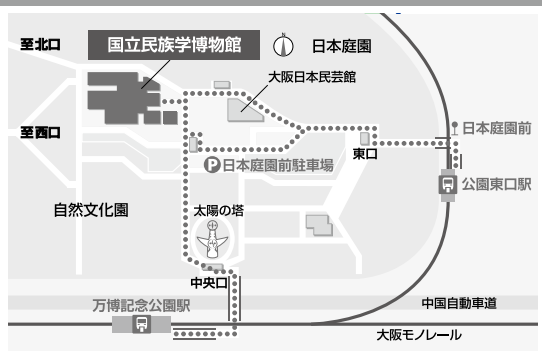
月刊みんぱく 2020年4月号

第44巻第4号通巻第511号 2020年4月1日発行

編集・発行 人間文化研究機構 国立民族学博物館
 〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園 10-1
 電話 06-6876-2151

発行人 園田直子
 編集委員 南真木人(編集長) 上羽陽子 齋藤晃
 菅瀬晶子 三島禎子 吉岡乾
 デザイン 宮谷一欒 長岡綾子
 制作・協力 一般財団法人 千里文化財団
 印刷 能登印刷株式会社

*本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報係に
 お願いします。
 *本誌掲載記事の無断転載を禁じます。



交通案内

- 大阪モノレール「万博記念公園駅」・「公園東口駅」下車、徒歩約15分。
- 阪急茨木市駅・JR茨木駅から近鉄バスで「日本庭園前」下車、徒歩約13分。
- 乗用車は、公園内の「日本庭園前駐車場」(有料)から徒歩約5分。「日本庭園前ゲート」横にある当館専用通行口をお通じください。
- タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れてきます。

みんぱくホームページ

<https://www.minpaku.ac.jp/>

みんぱくフェイスブック

<https://www.facebook.com/MINPAKU.official>

みんぱくツイッター

<https://twitter.com/MINPAKUofficial>

みんぱくインスタグラム

<https://www.instagram.com/MINPAKUofficial/>

みんぱくYouTube

<https://www.youtube.com/user/MINPAKUofficial>



梅棹忠夫

知的先覚者の軌跡

企画展「知的生産のフロンティア」関連

編者：国立民族学博物館 特別展「ウメサオタダオ展」実行委員会
発行：千里文化財団／A4判 全146頁／価格：2,400円（+税）

国立民族学博物館（みんぱく）初代館長、梅棹忠夫の90年の全生涯とその知的営みにせまる、渾身の一冊。総勢41名にのぼる執筆陣がそれぞれ異なる視点から解説をこころみる。2011年に本館で開催された特別展「ウメサオタダオ展」図録の再版。

お問い合わせ：国立民族学博物館ミュージアム・ショップ <https://www.senri-f.or.jp/wwb/html/>